

# フィリピンのマイクロファイナンスにおける最貧困層の排除と包摂

—— バタンガス州とカマリネス・スル州での実地調査から ——

雨森孝悦\*

## 要 旨

最貧困層がマイクロファイナンスのサービスから実態として排除されているか否かについては研究者の間でも見方が分かれている。本研究では、フィリピンの2つの州におけるフィールド調査を行い、農村部の最貧困層の実態把握に努めると同時に、排除の可能性について検討した。それを踏まえつつ、最貧困層の包摂という社会的使命と、組織としての持続可能性の向上という両立し難い2つの要請の間で揺れるマイクロファイナンス機関の取るべき方向について考察を行った。

## 目 次

- 1 はじめに
  - 1.1 最貧困層の排除をめぐる論争
  - 1.2 予備調査
- 2 バタンガス州の調査から
  - 2.1 調査地域の特性
  - 2.2 調査の方法
  - 2.3 調査の結果
- 3 カマリネス・スル州の調査から
  - 3.1 調査地域の特性
  - 3.2 調査の方法
  - 3.3 調査の結果
- 4 課題と展望

キーワード：マイクロファイナンス，最貧困層，包摂，排除，CARD グループ，フィリピン

## 1 はじめに

### 1.1 最貧困層の排除をめぐる論争

マイクロファイナンス機関が最貧困層の利用を事実上排除しているか否かについては以前から

---

\* 日本福祉大学通信教育部

論争が続いている。Maes と Foose (2006) によると、アメリカでは法律に基づき、米国国際開発庁のマイクロ企業向け基金の半分以上は非常に貧しい人びとの利益のために使われなければならないとされている。それは、大多数のマイクロファイナンス事業者が非常に貧困な人々を対象者にしていると謳っているにもかかわらず、実際はそれらの人びとにサービスが届いていないことに懸念をもった人たちが、マイクロファイナンス機関の透明度の向上のための法制を推進したからだという<sup>1</sup>。

Mersland と Strøm (2009) は、先行研究を吟味し、その結果からは最貧困層がマイクロファイナンス機関のサービスから排除されているという傾向があるとはかならずしもいえないことを確認した。そのうえで、彼らは 74 カ国にまたがる 379 のマイクロファイナンス機関についてパネルデータを使用した回帰分析を行った。その結果は、本来の社会的使命からの逸脱はとりたてて見出せない、というものであった。

フィリピンでは、アジア開発銀行の委嘱により農村部でグラミンバンク・アプローチをとる 28 のマイクロファイナンス機関の事業評価調査が行われ、それらがどのような人びとにどれくらいの便益を与えているかが統計的に調べられた。対象とされたマイクロファイナンス機関には NGO、農村銀行、協同組合などさまざまな形態の組織が含まれていた。その結果はマイクロファイナンス機関にとって不利なものであった。調査報告書によると、合計 160 万人におよぶ利用者の大部分は、政府の定義した貧困ラインより上の所得水準にあった (Kondo, 2007)。すなわち貧困層とはいえなかった。利用者のマイクロファイナンス機関への加入期間は平均して 75 カ月であったので、これらの人たちは加入以前は貧困層に属していたがその後所得を増加させたとの反論もありうるが、同じ事業地にいるマイクロファイナンス非利用者も同様の傾向を示した。

上記の調査ではさらに、被調査者を一人当たり所得の違いによって 4 つの階層に分けたうえで、融資による所得増加へのインパクトが測定された。その結果、融資は最上位のグループに対してのみ正のインパクトを持ち、他の 3 群に対しては負のインパクトを持つことが判明した。必要なときに融資が得られることで、たしかに一人当たりの所得や支出は全体として増えた。しかし、融資の効果が及ぶのは、じつは利用者のうちでも相対的に所得の多い世帯であり、所得の少ない世帯には統計的にむしろマイナスの効果しかなかったというのである。そのことは、マイクロファイナンス参加者と、同様の所得階層に属する非参加者とを比べてみた場合、所得の最上位層においてのみ参加者の所得増加率が非参加者の所得増加率より高かったことから明らかになった。報告書の著者たちは、こうしたことが起こる原因の 1 つとして、ターゲティングの問題すなわちマイクロファイナンスの対象者の選定の問題を指摘している。利用者は通常、既存の利用者グルー

1 Microenterprise Results and Accountability Act of 2004. これは Microenterprise for Self-reliance Act of 2000 を 2003 年に改正した The Amendment to the Microenterprise for Self-reliance and International Corruption Act をさらに改正した法律。

プのリーダー層やバランガイ<sup>2</sup>の役員の推薦により加入するが、そうした人たちが最貧困層の加入を望まないため、加入者の所得階層が上方にずれた可能性があるという。

## 1.2 予備調査

フィリピン最貧困層がマイクロファイナンス機関から結果的に排除されているとすれば、大手の CARD (Center for Agriculture and Rural Development) グループについても、最貧困層をどの程度利用者として包摂しているのか懸念されるところである。CARD グループは現在 NGO、銀行、共済組合など 8 つの組織からなるが、その中核をなす NGO はもともと、農村の最貧困層に属する土地なしの農業労働者の支援を目的として設立されている。上述のアジア開発銀行が調査を行った時はグラミンバンク・アプローチをとっており、とうぜん調査対象に含まれていたと考えられる<sup>3</sup>。このグループの 2008 年 12 月末の時点での利用者数はおよそ 85 万人、従業員数は 4 千人で、全国 82 州のうちの 52 州でマイクロファイナンス事業を展開していた。規模とカバーする地域の広さの点で、影響力の大きい機関だといえる。

以上のことから、CARD グループを念頭に置きつつ、農村部の貧困の実態を探るために、CARD 本部から比較的近いラグーナ州 Bay 町で予備的な聞き取り調査を行った。対象は CARD Bank の Bay 支店長とその下のユニット・マネジャー 5 人、また Bay 町、Calawan 町など 5 町を統括するエリア・マネジャーであった。さらに、近隣の Los Banos 町に所在する 2 つのセンター<sup>4</sup>でメンバーのインタビューを行った。期間は 2008 年 8 月 19～20 日であった。

予備調査からは断片的な情報しか得られなかった。たとえば、Saksa というバランガイでは大多数の住民が貧しい、Los Banos 町では鉄道の線路沿いに居住している人たちが貧困である、山岳地帯にはメンバーが少ない、果実栽培に従事する労働者は季節によって収入があったりなかったりする、家の近くで仕事がない時は居住地を離れよそで働く、などである。最貧困層について重ねて質問すると、極貧の人でも親兄弟や子に支えられている、身寄りのない人は乞食をする、というありきたりの答が返ってきた。CARD Bank の現場スタッフでも、最貧困層に関する実態を正確に把握しておらず、あまり関心もなかったといわざるをえない。

スタッフによれば、CARD は次のような加入基準を適用していた。

- ・所得 1 人あたり 1,500 ペソ以下であること
- ・資産 1 人あたり 150,000 ペソ以下であること
- ・同じ地域に 3 年以上居住していること
- ・世帯構成員のだれかがブルーカラーの仕事をしていたり、ある程度定期的に現金の入る仕

2 バランガイは州、町村の下に位置する行政の最小単位。人口は通常、数百人規模である。バランガイには選挙で選ばれる議長の他、書記、会計らの役員、議会議員がいる。

3 アジア開発銀行の調査対象に含まれた機関の名称は明らかにされていない。

4 センターとは、週ごとに集まって集金を行うメンバーのグループのことをいう。

### 事をもっていたりすること

この最後の要件は、最貧困層を事実上排除するものだが、CARD 本部の示している加入基準にもなかったものである。スタッフも、既存のメンバー同様、所得が少なく不安定な人たちを加入させたくなかったのではないかと疑われる。

Bay 町での予備調査からは、最貧困層がこの地区には多くないことがわかった。また、スタッフへの聞き取り調査だけでは必要な情報が得られない可能性が高かった。そこで、より体系的に最貧困層の情報収集を行い、そうした人たちの暮らしぶりを把握することにした。

## 2 バタンガス州の調査から

### 2.1 調査地域の特性

CARD 本部から調査地として紹介されたバタンガス州は、農業中心の州ではあるがマニラ首都圏に近く、州内に工業団地や有名観光地があるため、貧困地帯だというわけではない。むしろ首都圏を除くと地域別貧困ラインがもっとも高く設定されている州である。一人あたり年間所得で定義される同州の貧困ライン（2006 年）は 19,616 ペソであるのに対し、全国版の貧困ラインは 15,057 ペソにすぎなかった<sup>5</sup>。このように、相対的に所得水準が高いにもかかわらず、貧困ライン以下の世帯の出現率は同じ年に 25.6 パーセントと、全国の 26.9 パーセントと大差なかった。このことは、貧富の格差が大きいことを示唆している。このため、調査を実施することにした。

実際に調査した地点は小都市周辺に位置するトゥモロコシ栽培地帯であった。

### 2.2 調査の方法

CARD の紹介と協力により、バタンガス州の 4 つのバランガイで調査を行った（表 2 - 1）。スタッフによると、これらのうち少なくとも 3 つはきわめて貧困なバランガイと見なせるということであった。

表 2 - 1 バタンガス州の調査地

バランガイ	所属町	全世帯	調査世帯
Tamak	Padre Garcia	125	30
Bukal	Padre Garcia	426	30
Imamawo	Taal	109	30
Gahol	Taal	187	30

調査は 2009 年 8 月 26 日から 9 月 5 日にかけて行った。その時点では、これら 4 つのバランガイは CARD が事業を展開するために支店開設の準備をしており、サービスはまだ開始されてい

5 National Statistical Coordination Bureau, 2006

なかった。したがって CARD のメンバーは含まれていなかった。調査世帯は、それぞれのバランガイの全世帯から無作為抽出により 30 世帯ずつ選んだ。そのもととなる世帯リストはバランガイから正式の承認を受けて提供された。これらの世帯は、CARD のメンバーとなるには生活水準が高すぎて加入基準を満たさない世帯や、逆に低すぎて暗黙裡に排除される可能性のある最貧困層をも含む、当該バランガイの縮図とでもいうべきものである。このため、最貧困層がこの地域でどれくらいの割合で存在するのか、またどのような生活をしているのかを明らかにできると考えられた。

各世帯の貧困度合いを推定する方法としては、世帯構成員の職業、合計所得、資産を詳しく聞き取る方法も検討したが、比較的短時間で同程度の確かさのデータを得る方法として、チェックリストにしたがって貧困度スコアをつけるという簡便法が Schreiner によりマイクロファイナンス機関向けに開発されていることがわかったので、これを用いることにした (Schreiner, 2009)。この貧困度スコアは、0 歳～14 歳までの世帯構成員の数、学校に行っている子どもの数、女性世帯主または夫の学歴、給与所得者の有無、家屋のつくり、電化製品の所有状況など 10 項目を指標にしたものである。指標は、フィリピン統計調整委員会が毎年実施している貧困指標調査を基礎として作成されたもので、貧困への寄与度に応じてウェイトづけされている (参考資料 1)。合計のスコアからは、その世帯が貧困ライン以下にある統計的確率がどの程度かがわかるようになっていく。

### 2.3 調査の結果

表 2 - 2 に、調査したバランガイにおける平均的な貧困度スコアを示した。スコアが低いほど、当該世帯が貧困ライン以下にある可能性が高い。

表 2 - 2 バタンガス州の 4 つのバランガイの貧困スコア (メジアンと平均)

バランガイ	所属町	メジアン	平均
Tamak	Padre Garcia	36	40.2
Bukal		49	47.1
Imamawo	Taal	59	60.9
Gahol		38	41.8

(出所) 現地調査より筆者作成

メジアン (中央値) は最低で 36 (Tamak)、最高で 59 (Imamawo) であった。また、算術平均では最低 40.2 (Tamak)、最高 60.9 (Imamawo) という結果であった。36 というスコアは、貧困ライン以下の可能性が 48.9 パーセントしかないことを意味する (表 2 - 3)。つまり、調査した 4 つのバランガイで最も貧困と思われる Tamak でも、ごく平均的な世帯は貧困ラインより上にある可能性が高いということである。アジア開発銀行の指摘したターゲティングの問題は、ここでも当てはまるようだ。

(表 2 - 4) では、貧困度のスコア分布をバランガイ別に示した。0～19 までの間のスコアの世

表 2 - 3 フィリピン貧困ライン（全国版）に基づく貧困度スコア

スコア	貧困の確率 (%)	各バラングイの世帯数			
		Tamak	Bukal	Imamawo	Gahol
0- 4	96.6	0	0	0	1
5- 9	93.1	0	0	0	1
10-14	91.5	0	1	0	0
15-19	87.8	0	1	0	2
20-24	80.9	5	2	0	1
25-29	68.5	0	2	0	2
30-34	59.6	8	2	1	6
35-39	48.9	5	1	1	2
40-44	36.8	3	4	2	2
45-49	21.1	2	3	2	4
50-54	14.8	2	3	2	1
55-59	7.2	0	4	7	2
60-64	5	2	1	3	1
65-69	3.2	2	2	7	1
70-74	1.4	0	3	2	2
75-79	1.4	1	0	1	1
80-84	0	0	0	1	0
85-89	0	0	1	0	1
90-94	1.5	0	0	0	0
95-100	0	0	0	1	0
合 計		30	30	30	30

2004 Annual Poverty Indicator Survey

(出所) (Schreiner 2009) に依拠して筆者作成

表 2 - 4 バタンガス州の 4 つのバラングイの貧困度スコアの分布

バラングイ	スコア					
	0-19	20-39	40-59	60-79	80-	合計世帯数
Tamak	0	18	7	5	0	30
Bukal	2	7	14	6	1	30
Imamawo	0	2	13	13	2	30
Gahol	4	11	9	5	1	30

(出所) 現地調査より筆者作成

帯は Tamak と Imamawo では 1 世帯もなく、全体（120 世帯）でも 6 世帯すなわち 5 パーセントにすぎなかった。極度に貧困な世帯の割合は低いといわざるをえない。

もちろん、割合は低いとはいえ、個別にはきわめて貧しいと思われる人たちが確認できた。たとえば、ある女性は夫が履物の行商をしており、彼女自身はバラングイの有償ボランティアとして 1 カ月に 300 ペソを得ていたが、夫婦の収入を合わせても生活費が不足するため、6 人の子どものうちの一人が家計を助けるために小学校 6 年で学校をやめてパン売りを始めたという。この女性は CARD の支部が開設されれば加入したいと述べていた。行商の夫をもつ別の女性は、事故にあって負傷したが、お金がないため、州知事の計らいで公的健康保険に加入できたにもかか

わらず、病院には行かなかったと述べた。ある高齢の男性は他人の所有する牛の世話をすることによって生計を立てていたが、家の様子からもスコアからも生活の厳しさがうかがわれた。草刈りやサトウキビ農園での労働に従事する日雇いの農業労働者も、低賃金のうえ仕事がつねにあるわけではないので生活が厳しく、スコア上も最も低い層に属していた。この他、高齢の女性、寡婦、脳疾患や糖尿病を患っている人、ごみ捨て場での廃棄物収集や近所の人の洗濯物を引き受ける人たちがぎわめて貧困であった。とはいえ、その割合からいって、最貧困層向け専用のプログラムを実施するのが妥当かどうかは、議論の余地があるように思えた。この地域を担当することになる CARD 支部長は、最貧困層を排除するつもりはない、たとえ融資を受けなくても預金をするメンバーとして加入してもらえばよいという考えであった。

バタンガス州での調査からは一定の成果が得られたが、最貧困層に関する情報がなお不足するように思えた。このため、より所得水準に低い地域でもう一度調査をすることにした。

### 3 カマリネス・スル州の調査から

#### 3.1 調査地域の特性

カマリネス・スル州はルソン島南部の細長い半島に位置している。マニラからの距離は 450 キロほどである。行政上は 2 つの市と 35 の町からなり、土地の多くは水田、ココナッツ林、放牧用の草地によって占められている。州都 Naga はビコール地方全体の商業の中心である。

この州で調査した 6 つのバラングアイは 4 つの町に所属するが、そのうちの半数は海岸沿いの漁村で、残りは傾斜地ないし平地の農村であった。

カマリネス・スル州は、2006 年の貧困ラインが 14,634 ペソと全国版の貧困ライン（15,057 ペソ）よりも低く設定されており<sup>6</sup>、相対的に貧しいといえる。

#### 3.2 調査の方法

調査地のバラングアイでは、バタンガス州の調査地と異なり、すでに CARD がマイクロファイナンスのサービスを行っていた。最貧困層にすばやく接するために、各バラングアイの役員に住民の中でもとくに貧しいと思う世帯を 10～20 人挙げるよう依頼した。バラングアイのリーダーたちはそうした世帯が記憶にあるらしく、6 人中 4 人はその場でリストを作成してくれた。残りの 2 人はリスト作成を他の役員に頼った。これらのリストに従って訪問インタビューを行い、合計 73 世帯分の情報を得た（表 3 - 1）。

この方法で最貧困世帯を取り出すことには恣意性が付きまとうが、バタンガス州のように無作為抽出で調査サンプルを選び、その中から底辺世帯を識別するよりはるかに少ないサンプル数で



表 3 - 1 カマリネス・スル州の調査地

バラングイ	所属町	土地柄	調査世帯	主な生業
Balogo	Pasacao	沿岸部	13	漁業
San Cirilo	Pasacao	沿岸部	12	漁業, 商売
Bonot	Calabanga	沿岸部	10	漁業
Lugsod	Calabanga	傾斜地	10	農業 (コーン)
San Joaquin	San Fernando	傾斜地	17	ココナッツ採取
San Rafael	Pamplona	平地	11	農業 (稲作)

(出所) 著者作成

最貧困世帯に接することができるという利点がある。実際にインタビューを行いスコアカードによって貧困度の点数をつけたところ、全般的にスコアが非常に低く、バラングイ役員たちのつくった最貧困世帯のリストに大きな間違いはなかった。

調査は 2010 年 3 月 23 日～29 日に実施された。

### 3.3 調査の結果

バタンガス州での調査と同様、Schreiner によるスコアカードを使ってインタビューを行った。図 3 - 1 は調査した 73 世帯のスコア分布を示したものである。最低スコアは 2, 最高スコアは 69 であった。スコアの分布が低い方に偏っていることから推測されるように、メジアンは 19 と全般的に低かった。バタンガス州ではメジアンが 46 であったが、経済水準の違いだけでなくサンプルの取り方の違いもあるので、直接比較するのは適切ではない。

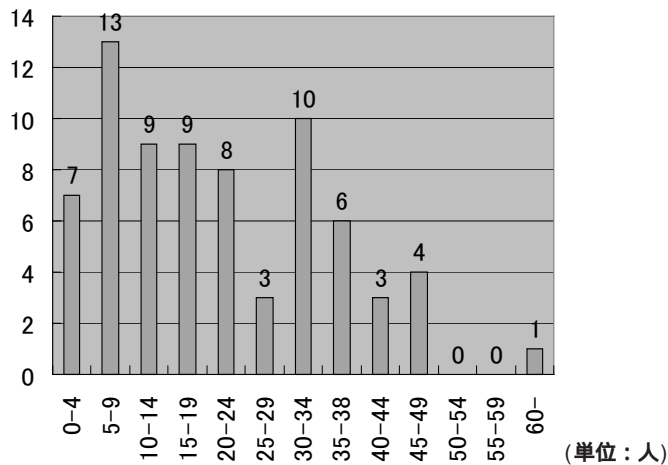


図 3 - 1 カマリネス・スル州の調査世帯のスコア分布  
(出所) 著者作成

表 2 - 3 を再び参照すると、メジアンであるスコア 19 の世帯は貧困ライン以下の可能性が 87.8 パーセントであることがわかる。スコアが 10～14 であれば 91.5 パーセント、5～9 なら 93.7 パーセント、0～9 なら 96.6 パーセントに上がる。この表をカマリネス・スルで調査した世帯にも当



ではめると、世帯の多くが高い確率で貧困ライン以下にあることがわかる。中でも Lugsad というバランガイの調査世帯はメジアンが 6 という低さであり、すべてが非常に高い率で貧困世帯だと思われた。

次にもう少し具体的に生活実態をみていこう。今回の調査では貧困の指標に関わる 10 項目の質問の他に、職業や CARD のメンバーであるかなど付加的な質問もいくつか行った。世帯主の職業は漁業、労働者、農業が多かったが、小商い、建設業、大工、運転手なども複数あった。世帯主が失業や病気、障害のために働いていない人は 73 人中 3 人と少なかった。その場合は世帯の別の人が家計を支えていた。成人して別世帯をつくっている子や親類縁者からの支援があると述べた人はほとんどいなかった。女性の世帯主またはその夫の学歴を見ると、80 パーセント以上がハイスクールを卒業していなかった。フィリピンには大変学歴が低いと思われる。家庭電化製品については、大半の世帯がテレビすら持っておらず、冷蔵庫を所有している世帯は 1 世帯のみ、洗濯機にいたっては皆無であった。調査対象のバランガイはすべて電気が来ていたが、電気代が払えないので電気をまったく使っていないという家庭も少なくなかった。年間を通じて 1 日 3 食食べられると答えた世帯は 80 パーセント弱であったが、これは食事を満足に摂れない日のある世帯が 20 パーセント以上存在するということでもある。

以上のように、調査対象世帯は概して大変貧困であった。その主な原因は、世帯主の仕事が不安定で収入も低いことであることが質疑応答からうかがえた。もう 1 つの要因は、子どもの数が多いことである。スコアの非常に低い世帯は、スコアが 30 以上の世帯と比較して小学校かハイスクール段階の子どもが多く、その他の面ではさほど変わらなかった。こうした家庭では、子どもが早く学校をやめて家計を助けるために仕事に就く傾向がある。そのことにより、将来高い収入の望める職に就くことが難しくなり、貧困が再生産されることになる。

CARD のメンバーであるかどうかに関しては、13 世帯すなわち 17.8 パーセントが世帯内にメンバーがいると答えた。しかしそれと同じ数の世帯で、かつてはメンバーであったが現在はやめている人がいた。サンプルの絶対数が少ないので即断は禁物だが、退会率はやや高いと思われる。47 世帯 (64.4 パーセント) ではだれもメンバーでなかった。メンバーにならない理由としてもっとも多く挙げられたのは、資金的な困難である。収入が非常に限られたなかで融資を受けて返済していくことに躊躇を覚える人が少なくなかった。また、メンバーになっていない女性の大半は事業を営んだ経験がなかった。そのことも、メンバーとなって事業資金の借入れを行うのをためらわせる原因となっている。

CARD メンバーのいる 13 の世帯の平均スコアは 26.5 であった。元メンバーのいる世帯では、平均スコアが 23.3 とそれよりやや低かった。さらに、メンバーのいない世帯の平均スコアを計算してみると、19.5 といちばん低かった。メンバーのいない世帯はメンバーのいる世帯より平均的に貧困で、元メンバーのいる世帯がその中間ということになる。世帯のだれかが CARD メンバーになることで貧困の度合いが下がった可能性は否定できないが、因果関係が不明なので断定もできない。ちなみに、調査したバランガイのうちでメジアンのもっとも高かった平地の San

Rafael では、総世帯 67 中の 42 世帯 (62.7 パーセント) にメンバーがいた<sup>7</sup>。またこのバランガイで貧困度を調査した 11 世帯中 7 世帯 (63.6 パーセント) と、ほぼ同じ割合でメンバーがいた。これに対し、もっともスコアのメジアンが低かった傾斜地の Lugsod では、元メンバーが 2 人いただけで、現役のメンバーのいる世帯は 10 世帯中 1 つもなかった。こうしてみると、だれも CARD のメンバーになっていないから貧しいままだというよりは、貧しいからメンバーになれなかったり脱落したりすると考えた方がよさそうである。

最後に、3 つの事例から最貧困層と思われる世帯の生活実態をみていきたい。調査したある女性には 4 人の子がいたが、そのうち 3 人は働いており、8 歳の末の子は知的障害者であった。インタビューを通じて母親自身にも軽い障害のあることがわかったが、女性は未熟練のマッサージ師としてわずかばかりの収入を得ていた。夫は失業中であった。この家族が生き延びていたのは、親戚宅に同居させてもらい、支援を受けることができたためである。もう 1 つの事例では、元は漁師をしていた年配の男性が世帯主ということになっていたが、10 年前に脳卒中で倒れ、後遺症を患っていた。妻はときどき洗濯婦として働くのみで、子どもたちの収入も親を養うほど多くはなかった。3 つ目の事例は 2 人の孫と同居している老齢の女性である。この人はわずかな土地にサツマイモを植え、自家消費分以外は売っていたが、食事に事欠くときがあると答えていた。女性には何人かの子がいたが、たまにしか母親に食べ物を分けてくれないということであった。

## 4 課題と展望

社会的企業としてのマイクロファイナンス機関は、組織や事業の持続可能性と最貧困層を利用者として包摂することとの間でジレンマを抱えている。より多くの貧困層に安定的に金融サービスを提供するためには持続可能性が必要であり、そのために一定の収益性も求められる。しかし、そのことはできるだけ多くの最貧困層を包摂することと両立させることが難しい。純粹に顧客としてとらえた場合、最貧困層はリスクや取引コストが高いために利益につながらず、優良顧客とはいえないからである。これらの人たちは往々にして交通のアクセスの悪い僻地に住んでおり、そこでは人口密度が低く経済の多様性がないなどの悪条件が重なっていることも多い。さらに事業経営のノウハウ、貯蓄、教育レベルなどあらゆる点で不利な立場にある。このため、顧客の選別と排除（自己排除を含む）を行うに足る動機は、マイクロファイナンス機関のメンバーにも職員にも存在する。

近年、NGO や協同組合などの非営利組織から株式会社などの営利組織への転換や、それを推進する政策をとる傾向がみられる（雨森，2010）。株式会社では、効率性、収益性がより重視されるので、最貧困層を排除する動機がいっそう高まったとしても不思議ではない。Chahine と

7 バランガイ役員の証言による。

Tannir (2010) は、銀行あるいは NGO からノンバンクに転換した 68 のマイクロファイナンス機関の時系列的な調査を行い、ミッションのずれが起きているかどうかの検証を試みた。彼らは、営利転換後にこれらのマイクロファイナンス機関が利用者を増やし、規模の経済と顧客層の拡大により持続可能性を高めているものの、顧客あたりの平均貸出残高は減少させており、最貧困層の支援という社会的使命からの逸脱が生じている、と結論づけている。

世界のマイクロファイナンス機関のレーティングを行っている Microfinance Information Exchange (MIX) は、営利・非営利を問わずマイクロファイナンス機関をアウトリーチ（融資を受けている人数やその伸び、市場占有率、ポートフォリオの預貸比率など）、融資の効率性、透明性、利益率の指標を用いて評価している<sup>8</sup>。しかし最貧困層にどれだけサービスを提供しているかは評価の対象としていない。MIX は世銀系研究機関の CGAP、ゲイツ財団、国連機関の IFAD などの支援を受けており、影響力が大きいだけに、だれが利用者なのかということを抜きにして競争を煽るようなレーティングには疑問がある。

では、本来のミッションに忠実でありながら、組織としての持続可能性を高め、そのことによってミッションの達成をより確実にする方策はあるのか。バングラデシュでは、BRAC やグラミンバンクが批判に応える形で最貧困層のための特別プログラムを組んでいる (Dowla et al., 2006), (Smilie, 2009)。CGAP やフォード財団も、極貧層が置かれている状態から「卒業する」事業モデルの模索を行っている。こうした試みがフィリピンでも本格的に行われることが望まれる。

## 文 献

- 雨森孝悦 (2010) 「東南アジアのマイクロファイナンス、マイクロ保険における営利と非営利 - フィリピン、カンボジア、インドネシアの動向から - 」『日本福祉大学経済論集』第 41 号。
- Chahine, S. and Tannir L. (2010) "On the Social and Financial Effects of the Transformation of Microfinance NGOs", *Voluntas* (2010) 21: 440-461, International Society for Third Sector Research.
- Dowla, Asif, and Barua, Dipal (2006), *The Poor Always Pay Back. The Grameen II Story*, Kumarian Press.
- El-Zoghi, Mayada, and de Montesquieu, Aude, (2009) "Creating Pathways for the Poorest: Early Lessons on Implementing the Graduation Model", CGAP Brief December 2009. Online, [http://www.cgap.org/gm/document\\_1.9.41162/Graduation\\_Brief .pdf](http://www.cgap.org/gm/document_1.9.41162/Graduation_Brief.pdf) (3.1. 2010)
- Kondo, Toshio (2007) "Impact of Microfinance on Rural Households in the Philippines. A Case Study from the Special Evaluation Study on the Effects of Microfinance Operation on Poor Rural Households and the Status of Women", Asian Development Bank.
- Maes, Jan and Foose, Laura (2006) "Microfinance Services for Very Poor People: Promising Approaches from the Field", *The US Law's Mandate to Reach Very Poor People: What Strategies are MFIs Developing, and What do they Mean for the Rest of the Field? -A Practitioner Survey.* Online, [http://www.microcreditsummit.org/papers/Workshops/6\\_MaasFoose.pdf](http://www.microcreditsummit.org/papers/Workshops/6_MaasFoose.pdf) (14.7.2009)

- Mersland, Roy, and Strøm, R. Øystein (2009) "Microfinance Mission Drift?", *World Development* Vol. 38, No. 1.
- Microfinance Information Exchange (2010) "2009 MIX Global 100. Ranking of Microfinance Institutions".
- National Statistical Coordination Bureau (2006) "2006 Philippine Poverty Statistics-Annual per Capita Poverty Thresholds, Poverty Incidence". Online, [http://nscb.gov.ph/poverty/2006\\_05mor08/table\\_1.asp](http://nscb.gov.ph/poverty/2006_05mor08/table_1.asp) (1.7.2009)
- Schreiner, Mark (2009) "A Simple Poverty Scorecard for the Philippines". Online, [http://www.microfinance.com/English/Papers/Scoring\\_Poverty\\_Philippines.pdf](http://www.microfinance.com/English/Papers/Scoring_Poverty_Philippines.pdf) (8.7.2009)
- Smilie, Ian (2009) *Freedom from Want. The Remarkable Success of BRAC, the Global Grassroots Organization That's Winning the Fight Against Poverty*, Kumarian Press.

## 参考資料 1 貧困度を推定するためのスコアカード（フィリピン用，2009 年版）

## Simple Poverty Scorecard for the Philippines

Indicator and Value	Points
1. How many people in the family are aged 0 to 14?	
A. Five or more	0
B. Four	4
C. Three	9
D. Two	15
E. One	20
F. None	26
2. Do all children in the family of ages 6 to 14 go to school?	
A. No	0
B. Yes	2
C. No children ages 6 to 14	4
3. What is the education level of the female head/spouse?	
A. Graduate primary or less	0
B. First- to fourth-year secondary	3
C. Graduate secondary	6
D. First-year college or higher, or no female head/spouse	11
4. Do any family members have salaried employment?	
A. No	0
B. Yes	5
5. What are the house's outer walls made of?	
A. Light materials ( <i>cogon, nipa, or sawali, bamboo, anahaw</i> )	0
B. Strong materials (iron, aluminum, tile, concrete, brick, stone, wood, asbestos)	4
6. What is the house's roof made of?	
A. Light materials (Salvaged, makeshift, <i>cogon, nipa, or anahaw</i> )	0
B. Strong materials (Galvanized iron, aluminum tile, concrete, brick, stone, or asbestos)	2
7. What kind of toilet facility does the family have?	
A. None, open pit, closed pit, or other	0
B. Water sealed	7
8. Does the family own a refrigerator?	
A. No	0
B. Yes	10
9. How many television sets does the family own?	
A. None	0
B. One	6
C. Two or more	21
10. Does the family own a washing machine?	
A. No	0
B. Yes	10
Total score:	

Microfinance Risk Management, L.L.C., <http://www.microfinance.com>  
 (出所) Schreiner, 2009